優秀賞

農業について

第三中学校二年　昆　義雄

僕の家は、農業をやっています。僕はあまり関心がなかったのですが、農業について学校で習ったり父から聞いたりしたことをもとにして書いてみます。

昔から米作は、日本の農業の中心になってきました。農家数の大部分が米作りをしています。米は国民の主食であるため、その値段の上がりがはげしいと、ほかのものの値段に大きく影響します。そのため、現在では、政府は米を一定の値段で、一定に買いあげているのです。

ほかの作物では、とれすぎると作物の値段がひじょうに安くなり、その作物からの収入が少なくなりますが、米からの収入は毎年安定しています。ですから農家としても、安心して米作ができるのです。これは大変いいことだと思います。それに最近では、米作技術が進み、単位面積あたりの生産量が多くなっていますので、米作をおもにしている農家の収入は増えています。このことは、日本の農業が米作中心からぬけきれない原因にもなっているといわれています。

米以外の農産物で、これから消費が増えるとみこまれているものがあっても、値段が安定していませんから、危険をおかしてまでその農産物を生産するより、いままでどおり有利な米作にとどまった方がとくだというわけです。しかし、米が余っていることから考えれば、それに変わる他の作物も価格の安定をしてやることが必要だと思います。

日本の農業では、いままでも米作が中心になっていますが、最近では農業生産のうちで、かなり大きな割合をしめる農産物があらわれてきました。それは、くだもの・野菜・畜産物です。産物の中で、生産物ののびがめだつのは、くだもの・野菜・畜産物です。とくに、くだものと畜産物ののびはめざましく、一九五五―一九五七年の平均とくらべると、六〇年には二倍以上に増えています。牛乳は二・五倍に増えています。これらの農産物は、これからも、もっと消費量が多くなると思われるから、生産ものびると思います。ですから今後は、くだもの・野菜・畜産物の生産に力を入れた方がいいと思います。そうすれば、米作中心の日本の農業も、かなり変わるわけです。

一戸の農家で、多くの作物を作り、乳牛・ニワトリなどをかったりするというように、種類の多い農産物を生産する方法を「農業の多角経営」といいます。多角経営では、いろいろな農産物を生産しているので、一つの作物に不作や値下がりなどがあっても、ほかの作物からの収入がありますので、農家の収入は安定しています。また、いつでもなにかの農産物を作っていて農かん期がなくなり、労働力にむだがありません。しかし、いろいろの農産物を生産するため、一つの作物を専門に作る場合より生産費が高くつきますし、いそがしくて研究するひまがなく、どうしても品質が悪くなるという欠点もあります。

最近では、農業のはたらき手がたりなくて多角経営をすることが難しくなっていますし、農産物の生産費を安くすることがだいじだとさけばれています。ですから多角経営といっても、種類を少なくして生産費を安くし、品質も良くしながら、農家収入を多くしようとしています。

農家の収入は、耕地が広いほど多くなりますが、耕地のせまい農家よりも中間の農家では、農業と兼業をあわせても、現金収入では多くならないのです。総収入では多くても、農業のための支出が多くなり、家計は苦しいのです。また、農家の収入のうちで、農業以外からの収入が多くなっていることも、最近とくにめだっています。

私たちは、これからももっとうまく農業を利用して、日本が農業国として発展するようにしていきたいと思います。

優秀賞

父と農業

第五中学校一年　高野茂一

ある日、

「農業ってどんな仕事だ」

と聞くと父は、

「つらくて地味な仕事だ」

と言った。ぼくは心の中で、父のいうとおりだなと思った。

ぼくの家は、二町六反の田と、一反の畑を耕作している専業農家です。父は田んぼの仕事が忙しくないときは、ぼく達の相手をしてくれたり、水道関係の仕事に出ている。その仕事から帰ってくると、すぐ母と田んぼに行って暗くなるまで仕事をする。そんなわけで、ぼくは、農家の仕事は大変だということを、小さい頃からよく知っていました。

最近では、農作業もほとんど機械化になっていて、春の田植えから秋の収穫まで全部機械でやれるようになったが、「一年のうちで何日間も働かぬ高い農機具を買わなければならない時代になった」

と父が言っていた。

もう早生稲の刈取りが始まり、日曜日になるとぼくも稲刈りの手伝いに行く。コンバインの籾袋を道路の自動車に載せる仕事だ。小学校の時は全然持ち上げられなかったが、今では自動車の上にのせる事ができた。一日中やったら、だいぶ疲れたが、次の日曜日も、雨が降らなかったら手伝うつもりだ。

稲刈りを終えて帰ってきた日曜日の夜、父と母が転作問題で話し合っていた。

「一体何を作ったらいいのか」

「今後、苦しくともこれを機会に、主に稲作と他の作物を取り入れて、経営をやっていかなければならない」

とか、また父は、

「こんな問題には負けてもおれぬ。いつか、きっと農家らしい経営をやれるよう、努力しよう」

と話し合っていた。

そのあとでぼくは、父と久しぶりに長話をした。今後の農業は、どんな農業になっていくのか、そして、今の農業のやり方を話したりした。そしてぼくは父に、

「農業って、いつまで続く」

と聞いたら、父は、

「人類がこの地球に生きている限り、大地がある限り、農業はあるよ」

と言った。そして父は、

「人間が生きていく上で一番大切なのは、水と食べ物、そして服、住まい。衣食住という言葉があるけれど、食衣住だろうな」と言った。

今後の日本の農業は、きっと苦しい時が続くかもしれないけれど、みんなが努力すれば、かならず良くなると思う。今後の農業経営は大変だけれど、ぼくは、代々続いている家の農業をつごうと思っている。